



1984年(昭和59年)

8月号(No. 470)

 社団法人 日本山岳会
 The Japanese Alpine Club
 定価一部 150円

目次

- 正しい山名を守るものは
誰れなのか 今西錦司……………(1)
- 海外の山……………(2)
- 「ネパール政府の山名改訂」
追悼 水野祥太郎氏
佐藤久一朗氏……………(3)
- ビレンドラ皇太子に献上された
ピッケルについて 松田雄一……………(3)
- パークス夫妻の富士登山(下)……………(4)
- 図書紹介……………(5)
- 「山びとの動物誌」「一等三角点標高
順一覧表」「大菩薩の囲炉裏」「丹沢
夜話」「死の地帯」
東西南北 「若き日の泰安さんの想
い出」ほか……………(5)
- 中高年者の大雪山スキー縦走……………(9)
- 報告 自然保護委員会ほか……………(9)
- ムクチナートの旅……………(11)
- お知らせ……………(13)(15)
- 八十周年記念募金応募者芳名……………(13)
- 会務報告・ルーム日誌・会員移動……………(14)
- 図書受入報告 図書委員会……………(15)

▶日本山岳会事務取扱時間

 月、火、木、土曜 10時～20時
 水、金曜 13時～20時
 日曜・祭日は休み

▶図書室開室時間

 日曜・祭日・月曜を除く毎日
 13時～20時

お知らせ電話

234 六六五九

正しい山名を

守るものは誰れなのか

今西 錦司

山名を尊重せよ、などという教訓じみたことをいうのは、じつはいやなのである。山へ登るものなら、いわれなくても、だれだって山名を尊重するものと思っていながら間ちがいで、当今は山名がかならずしも尊重されていないといふことがわかってきたので、いやなことを書かねばならなくなったのである。

まず山名というものはいつごろからつけられたものか、よくわからないが、その土地に住む人間のいなかった頃には、山名も存在しなかったであろう。やがてその土地に人間が住みつくようになると、朝夕見上げる山に、山名がつけなくなる。人里はなれて見えな

い所にある山でも、たれかがそこに山のあることを知ったら名前がつく。北海道の山はどこへ行ってもアイヌ語の名前がついている。ヒマラヤの高峯にもチベット人のつけた名前のあることが、おいおいわかりだしてきた。名づけの親はとつきの昔にこの世を去ったであろうけれども、山の名前は子子孫孫に語り伝えられて、今日に及んでいのである。富士山も立山も白山もみな明治以前から知られていた。

ところが、明治のはじめに、陸軍の参謀本部に陸地測量部というもののできて、はじめて正確な地形図を発行しだした。現在の国土地理院の前身である。その地図の名にはその山の名前が採用されて

いることもあるが、まに往々にして部落名の場合もあり、点名というのとは一種の符號のようなものであって、部外者には意味のないものとされている。

これだけでもわかるように、古来から伝えられたその山の名称と、測量がはじまってからいわば任意につけられた点名とをくらべた場合、そのいずれを重視すべきかは、もはや論を待たないところであるにもかかわらず、このごろ巷間に一等三角点研究会などというものが現われて、点名を羅列し古来からの山名をあたかも点名に付随したもののよう取扱っているのは、主客顛倒もはなはだし

しる滑稽というべきだろう。私は若い頃京都北山のヤブ山に登って、登った証拠に三角点の石の上に瓶をおき、その中に名刺を入れたことがあり、今日もなお三角点の石には誰にも負けないぐらいたく愛着を寄せているものだが、その三角点の点名など知ろうと知ると、山登りにはいっこうに差しつかえを感じておられない。

今年もまた上高地山研で逢いましょう！

ら、どの会社も商社も競って宣伝用のパンフレットを出す時代に、せめて月刊雑誌ぐらいは発行して、もうすこし国民にたいするサービスがはかれてもよいのではなからうか。

国土地理院にたいする憎まれ口は、もうこの辺でやめるとして、ついでだからもう一つだけいわせてもらおうと、このごろ出ている五万分一図には、従来の五万分一図になかった山名の記入が目立つ。たとえば五万分一図「京都東北部」の比叡山の尾根つづきに△六八一メートルというピークがある。それがいつごろからか、登山者のあいだで竜髯山と呼ばれるようになった。ところで最近の五万分一図をみると、新たに大尾山という名前が藪から棒に出てきて、その名がいまや拡がろうとしている。登山者は年々多く、新人は古いことを知らない。国土地理院の地図に出ておれば間ちがいないと、思ってしまう。ここにも私にいわせたら、官尊民卑に慣らされたわが国民の弱点が現われているのだが、竜髯山が正しいか大尾山が正しいかは、じつのところ国土地理院に聞いても判然としないだろう。国土地理院も近ごろはその地図の製作をもっぱら下請会社にまかせていて、正しいか正しくないかをチェックする手段を持ち合わせていないからである。

富士山・立山のように、その山名が社会通念として固定している山、京都というなら比叡山や愛宕山を別にして、ヤブに埋もれてたいてい眼立たぬ山にさえ山名があるであろうか。私の原則からいいうなら、かならずある、ということになる。ただしそれは社会通念になるほどの知名度はなく、山名というよりはむしろその地域で使われている地名の一種にすぎないかもしれない。したがって一般に呼びすてのままで、最後に山・岳・峯などという字のつかないものであっても、その地域についていえば、古来から伝承されてきた、親しみの深い名称なのである。

ではそうしたいわば隠れた山名をどうしてさがし出すかであるが、私の若かった頃には山ではたいてい木樵や炭焼きがたぐさっていたから、山名にしても谷の名前にしても、聞けば手取り早く教えてもらうことができた。またその頃私たちは日が暮れて、山で泊めてもらう場合には、かならず部落の代表である区長さんの家を訪ねることにしていた。区長はだいたい実力者でもあり、物知りでもある人がなっていたから、土地のことを知るためのインフォーマントとして、いちばん信用がおけたのである。そうして苦心して、地元で調べた地名と、この頃の地図に出てくる地名とが一致しないことは、私にたいへん悲しい思いをさ

海外の山

ネパール政府の 山名改訂

ネパールでは、「ネパール山名改定委員会」の手によって、八千メートル未満の三十一座のピーク名を修正する作業を終えた旨の連絡があり、先日掲載された高度修正の続編としてこの会報に発表されることになっている。ここではその経緯とみられる予備資料を提供しておく。

山名改訂委員会の委員長はHarka Gurungで同氏の著書「Maps of Nepal」の第二章「Political Map」によると、中国、ネパールの合同調査隊によって、長年にわたり航空写真をベースに中ネ国境周辺の作図を進めていたが、一九七九年に中ネ国境全域、五十七葉の地図を完成したという。その範囲は国境ライン、4・5キロの両サイドにわたっており、等高線は二十メートル、百メートルごとに太線で記入した縮尺五万分の一の地図である。地名はネパール語と中国語が記載されている。このことから、ネパール政府は今後、現地名を採用することにしたいものとみられる。

H・グルン氏は一九三七年ラムジュン・グルカ兵の家庭に生まれた。一九五九年パトナ大地理学を卒業、コロンボ・プランによりエジンバラ大学に編入、一九六一年卒業後は同校の「オリエンタル・アフリカ研究所」の講師、およびトリブバン大の教授をつとめた。コロンボ・プランのネパール代表としても活躍しており、著書に「ANNA, PURUNA TO DHULAGIRI」(一九六八)、「REGIONAL DEVELOPMENT PLANNING FOR NEPAL」(一九六九)、「VIGNETTE OF NEPAL」(一九八〇)などがある。

エベレストの地名だが、中国では、清朝の康熙帝がキリスト教布教の自由を認め、一七〇八年には中国全土の地図作成を企画、フランス人宣教師に依頼した。約八年をかけ韃靼、朝鮮、チベットの地図を作り、直ちに仏本国のダンヴァルによって製版し「皇輿全覽図」を完成、ここで「珠穆朗瑪」がエベレストに冠せられた。AJ(一九二一年)によると、当時も「この地図一枚が頼りであった」と英エベレスト第一次経過報告のあとに記されているが、HJの「エベレスト山名の変遷のなかで、ホジソンの「DEVADHUNGA」から、一八五五年、シュラギントワイト兄弟の「GAURI-SANKAR」へ。これは当時のドイツの地図に記名され、ダグラス・フレッシュフィールド(のちにRGS会長)も「これでエベレスト山名の論争に終止符が打たれた」と結んでいる。しかし、その後の調査で否定され、「EVEREST」が一九二〇年発行のタイムズ・アトラスに掲載されて、一般化した。この経過のなかで、現地名採用のための努力は多大なものがあつたのだが、しかし現地名(ネパール側)を正確に把握するまでに至っていなかったのは事実のようである。今後ネパール側はどう呼称するのか、グルン氏の前記著書には「EVEREST (GAGARMATHA)」とある。

一九八四年のヒマラヤでは、インド・エベレスト隊のパチェンドリ・バルが五人目の女性登頂者となった。最初の女性は一九七五年の田部井淳子で、ついで同年の中国隊の潘多、一九七八年のヘルリッヒコフファール隊に同行したポーランドのワルダ・ルトキエヴィッチ、また翌七九年にはドイツ隊のハンネローレ・シュマッツ夫人(登頂後死亡)がそれぞれ登頂している。

(片山全平)

追悼

せる。たとえば最近売りだされている五万分一図「四ツ谷」に出てくる山名、ソトバ山（八〇六メートル）、鴨瀬谷山（七七八メートル）、掛橋谷山（七五五・五メートル）などは、私の調べたところではそれぞれ滝の谷、シライシ、カヤン谷となっている。想像を逞うすれば、これらの地名は、京都のある山岳会の会長をしていた人が、出版したあまり信用のおけない地図から、国土地理院の製図の下請会社が採用したものらしい。

もしそれが事実だったら、国土地理院の権威もまさに地に墜ちたものというべきである。しかし、これを国土地理院に不面目だと思われる術もない。

私がこの一文を草したのは、若い頃から親できた京都北山の山や谷に伝わる由緒ある地名を、ながく保存し、これをわれわれの子孫に伝えたいという切々たる気持ちからである。どんな世の中になろうとも、正しきを正しいとして誤れるを糺してゆくことは、たれ

かがやらねばならない仕事である。私にそれらの地名を教えてくれた北山の古老たちの大半は、すでにこの世を去ったことであろう。私もやがてそのあとを追うべき運命にある。山村に青年はいても、彼らはいいてい伝統に興味をもたず、地名をたずねても知らないことが多い。これから正しい山名を守り伝えてゆくものは、いったい誰なのでしょう。山名を親身になって考えてくれる人が、どこかにおられないものだろうか。と願う晩年であり最後であった。

と願う晩年であり最後であつた。
(徳永篤司)

名誉会員

佐藤久一朗氏

(會員番号一六三〇)

誰々さんと云つて頭に浮かぶイメージがこれ程多彩な人物を私は知らない。小槍、屏風岩の初登攀に留らず、晩年スイス・アルプスの岩登りに挑んだクライマーである一方、包丁を持たせれば一流の調理師であり、ウエストンさんや木暮さんのレリーフ等に見られる芸術的才能、軽登山靴の代名詞にまでなったキャラバンシューズの開発等にみられた職人的な腕の冴えなど、そのどれもがひとかどのものであった。

これらはご葬儀当日の弔辞にも

ビレンドラ皇太子に
献上されたピッケ

松田雄一

「山」四五六号に広瀬瀨氏が、門田のアイゼンが世に出た頃のことを書かれている。門田作で思い出されたのが、ビレンドラ皇太子のご成婚式に際し、本会から献上された門田作のピッケルである。「山」に記録としてとめておく必要があると思ひ筆をとった次第

である。

昨年一月の三水会の席上、ピッケル研究家の平柳一郎会員から、次のような質問を受けた。以下は平柳会員の話。十数年前のある日、好日山荘の海野治良氏から珍しいピッケルがあるので、写真にとっておいたらどうかとの連絡

盛らせて頂いたのだが、葬儀の終りに、お通夜、ご葬儀が社葬でもなく、会場もご自宅でしめやかに行なわれたことなど、全て佐藤さんご自身の生前からのご指示であった旨のお話しをうけたので、出かけてみるとそのピッケルには写真のように、マークのある面に「1970 田中田（ア）田中田印」裏面に「田中田印」という刻印のある門田作のピッケルであった。

その後、写真のことは忘れてしまっていたが、最近になって思い出し会報「山」などを調べてみたが、献上の経緯等については何の記録も残されていない。この件について何か知っていることがあったらご教示願ひ度い」

一九七〇年三月といえば、私は本会エベレスト登山隊の一員としてキャラバンの途上にあつたのでご成婚式については、全く記憶に

水野祥太郎氏

(會員番号一二五九)

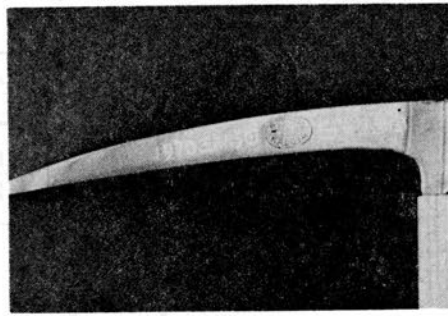
三月の初め、水野さんより電話があった。倉敷に講義でやってきて、ついでに診察をうけたら、心電図が悪いといって入院させられているんだ。別に痛くも苦しくもないけれど一寸帰れないので、カイルムの件をよろしく願います。いつも淡々とした、むしろ元氣そうなの会話が水野さんとお別れになった。

約三年前、JAC会長に立候補

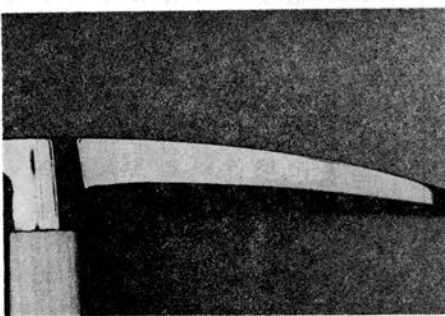
山をきれいにゴミは持ち帰ろう

記されている以上、本会から献上されたものであることは間違いない。

そこで当時カトマンズの日本大使館に勤務されていた会員、松沢憲夫氏に聞けば判るのではないか



「1970 三月吉日 日本山岳会」の刻印がある面



「寿ピレンドラ皇太子殿下」の刻印がある面

と、ボリビア在住中の同氏に問合せてみた。松沢氏の返信によれば、ご成婚式の前日か、前々日、国王陛下から招待を受けご成婚式に参列した日本山岳会のどなたかが、カトマンズに持参し、これを吉良大使同道の上、王宮へ献上にいかれたということがわかった。

そこで当時ご成婚式に参列された本会々員を調べてみると、西堀栄三郎、神原達両ご夫妻がおられることが判ったが、神原氏にはその記憶がなく、同氏から毎日新聞社に依頼されて写してきた写真が掲載されている同社関係の刊行物（サンデー毎日か？）の別刷りを送っていただいた。それによると「エベレスト登山隊長の松方三郎氏は、この門出を祝うかのように行なわれたネパール皇太子の挙式に、帰路、銀のピッケルを賜る」という記事がでており、益々混乱におちいったが、この「銀のピッケル」は間違いで前記の門田作のピッケルのことと思われる。

一方、西堀氏も、当初そのようなピッケルは知らないとのことであったが、漸く思い出し出していた。それによると、献上の経緯は次の通りである。

戴冠式に出発する直前に、

— 登山史メモ③ —

パークス夫妻の富士登山（下）

山崎 安治

谷有二氏の「幕末・外人富士登山異聞」（『山と溪谷』第五〇〇号）によると、パークス一行は太陽暦十月七日、村山口から登頂しているが、パークス公使の報告にある前年（慶応二年・一八六六年）のアメリカ人とスイス人の一行の登山というのは「ヤング・ジャパン」第二巻第二章「富士登山」に「八月二十日、ヨーロッパ人の一団が登山し、頂上の小屋で一夜を過ごした。一行はちやうど八日間横浜を留守にした」と触れているのである。伏見功著『富嶽歴覧』（昭和五十七年四月、現代旅行研究所刊）にパークス一行の富士登山の日本側記録として、一八六六年（慶応二年）八月二十日から二十四日の村山口からの登山記事が『幕末明治新聞全集』第一巻の「日本新聞」より引用しているが、これは年月日から見てパークスの登山に関するものではなく、その前年慶応二年八月のスイス人の登山の記事である。世界文庫刊の『幕末明治新聞全集』第一巻の当該箇所を見たところ「富士山紀行」と題し「英人若干員近日富士山に遊へり。その日記を左に抄録す。

西暦八月十六日、即日本七月七日、日本役人五人に嚮導せられ、横浜を発し、藤沢を経て小田原に至る」とあり。この箇所を伏見氏は略され、勝手に「八月十六日、夫人と幾人かの友人、そして日本の役人を伴って横浜を出発」と書きなおしているが、原文には夫人が同行したことなどどこにも述べられていない。パークス一行の登山ではないので当り前のことだが、このスイス人一行というのはスイス総領事カスパー・プレングヴァルド

らの一行で、このオルコックに次ぐ外人の富士山第二登については、谷有二「幕末・外人富士登山の歴史的背景（三）」（『山書月報』第一六三号）、および「幕末富士登山異聞」にくわしい。

パークス夫人、フアン・パークスは、一八五六年一月、パークスと結婚、一八六五年六月、日本駐在公使に任命された夫君とともに来日、滞日中浅間山などにも登り、一八七六年十一月、子供たち家庭を作るため夫を残して帰英し、一八七九年十一月病没している。

江戸時代から明治の初めにかけて女性による富士登山は禁止されており、村山口では馬返し、須走口では中宮小屋社、吉田口では二合目の御釜から先への登山は許されず、庚申縁年に限りそれよりやや上までの登山が認められていたという。しかしひそかに

登った女性もいたといわれ、天保三年（一八三一年）辰の九月二十七日、辰という江戸の二十五歳の女性が男装し、五人の男と頂上に登った文書が最近発見されており（昭和五十七年八月十一日付読売新聞「百五十年前富士に立った女」、パークス夫人の登山は女性として最初の富士登山とはいえないが、外人女性としての初めての記録である。）



さの中にのぞかせる彼の實力の程を見直させられました。私はとうとう中畠の不信を口に出すこともできず、山のことなど真面目に語り合いました。若き日の泰安との出会いでした。

翌日、私は前穂へ、泰安さんは西穂に向って奥穂高まで一緒にまわりましたが、急に天候がくずれて小屋に戻りました。そして私たちはその足で濁沢から上高地へ、泰安さんは、次の天候を待つて西穂高まで全縦走をなし遂げられました。

その後、泰安さんは白頭山や興安嶺に、私はナンダコトと、お互に相手を意識しながらその道をたどりましたが、戦後マナスルで同一目標をもつようになりまし。ヒマラヤに対しては、常に彼の行動力と積極性におされ、面と向った時に私の意見を差しはさむ余地はありませんでした。私はマナスル以後、種々な病気が出て山登りから遠ざかりました。それに引きかえ、持病を持ちながら、幾度かヒマラヤへでかけられた彼の心境は、彼の著書「森林・草原・水河」からよく伺い知ることが出来るように思います。

〔編者注〕 本稿は四月十九日の加藤泰安を偲ぶ会（七月号会報欄号にこの会の模様は掲載した）の席上、堀田弥一氏が話された内容をまとめたものである。

泰安の手紙

望月 達夫

私は少々捜しものをする必要があり、古いものをしらべていたら偶然タイアンの手紙が二通出てきた。彼から手紙を貰ったことなどまったく記憶から失われていたが、憶い出の縁になるとも思っここに記しておく。

〔昭和三十六年十月四日付封書〕

前略 御無沙汰失礼、北海道に行ったら専ら行務に精励すると称し、山登りばかりしている、新橋支店長はなげいていた。小生の耳にも大いにエゾ地の山々をかせいでいる消息が来る。まことに結構。本年は何かと忙しく、山らしい山は一向に行かぬ、六月に日ヶ窪の旦那と経塚―焼石に行つたが、藪コギ十八時間、素晴らしい山行だった。先月二十二日より、昨年貴兄が行った折、横目で見通った男鹿岳に行つた。若い連中三人つれて横川から入り、一夜、沢の中に寝て男鹿―大佐飛―板室とぬけるつもりだったが、物凄いやブコギで男鹿岳から追い返えされた。この山はまだ全く道がなくその上稜線まで喬木地帯が上り、二メートルに及ぶ道松で流石ヤブコギ好きの小生も全く閉口。余った一日は岩魚釣と茸狩を満喫して帰京した。この山は四月の中旬前

私が過去に編集した「全国一等三角点（本点・補点・増大点）九六八の所在地一覧」の中の誤り三つの訂正がなされ、より一そう完成されたものに近づいたといえる。

ただ残念に思えるのは「一等三角点研究会編」「一等三角点蒐集」をもとにされて作っていかれたのかちよつと雑なところが目立つ。一等三角点の総数九七一点となつてい

るが実際は九七〇点と思われる。五〇〇米以上五一一四座と表紙に出ているが、一頁には五〇〇米以上五四七座と計算されている。

一等三角点総数の中に本点、利尻山、泊山、補点では焼山、帽子石山、松長山の計五座がもれてい

る。いったい正確な数はいくつだろうか。さらに、札内岳以下一四座の標高に誤りがあり、幌内山、鬼面山、防目喜岳の三座の山名がまち

がって記入されている。校正のミスとは思えないし、せっかく苦労してまとめられた作品だけにおしまれてならない。

A五判 二二ページ 昭和五十八年十二月二十五日発行 一等三角点研究会

（水野公男）

大菩薩の囲炉裏

勝縁荘開設五〇年

記念刊行会編

秩父多摩国立公園にも含まれる

大菩薩連嶺の山中、富士山を正面に臨んで、がっしりした、しゃれた造りの山小屋がある。それが勝縁荘であり、勝縁とは、小説『大菩薩峠』の作者中里介山が昭和七年初夏の山小屋開きの日に訪れて命名した名なのである。經典にある因縁法縁を表わす言葉で、地位も貧富の差もなく、一夜の雨露をしのいでともに小屋の火を囲むものは百年の知己であり、これを勝縁のともがらという……。小屋の主、益田勝俊さんは、このとき三十七歳。

昨五十八年十二月、大菩薩山麓の塩山市において、本書の出版記念会をかね、勝縁荘開設五十年と益田勝俊翁の米寿を祝う会が盛大に催され、益田さんはおお元氣な姿を見せられたのであった。

本書には、作家の杉本苑子、山村正光本会々員など多くの方々の寄稿のほかに「益田勝俊 自選」と題して、「一葉回想」「樋口一葉と甲州の農民」「介山、一葉、甲州」「中里介山先生と私」「大菩薩今昔雑記」など、益田さん自身の著作も集められている。また、ひととき興味深いのは、「勝縁荘主人 益田勝俊」の題で書かれている中野利子氏の手になる益田さんの人生記である。

益田さんは東山梨郡大藤村中萩原（現塩山市）の大地主の家に生まれた。慶応義塾普通部・高等部に学んだあと村に帰り、私塾で教

鞭をとったりするうち、いわゆる大正デモクラシーの風潮をうけて農民運動にも加わるようになった。その結果、ファシズム抬頭にともない検挙されるはめにもなり釈放後に山小屋の建設を心に決めたのであった。「勝縁荘主人」には、この辺のいきさつも詳しく書かれていて、明治・大正・昭和の三つの時代を生きてきた一知識人の記録としても読ませるものである。合わせて「益田勝俊年譜」が明治二十八年以来の長い人生航路を物語っている。

A5判 二二九ページ 昭和五十八年八月発行 非売品 けやき出版

（横山厚夫）

丹沢夜話

ハンス・シュトルテ著

文科系の大学教師を職業にする私は、人並み以上に多くの本を読まなくてはならず、そうすると読書はもはや楽しみごとではありえない。いわばすれつからしの読書人であるために、めったなことでは感動しないし笑いもしない。泣かせよう笑わせようとする筆者の計算が見すかせるように思えて鼻白んでしまうからである。西穂の独標で感激の声をあげている人々を横目でじろりと見て苦い顔をしながら間の岳の難路をこえて奥穂をめざすアルピニストに似ているとでもいったらよいか。そんな私

後でなければ無理。

日ヶ窪のダンナも、その後、相変らず怪しげな山をヒンビンと稼いでいるらしい。

さて今回貴行の音響施設を弊社に御用命いただき、まことに光榮至極。大いにサービスこれつとめるつもりである。営業部武井君が参上致します。宜敷御願いします。先日、直行さんに御目にかかった折、札幌もJACの面々が随分集り賑やかな由。君が少し位山登りをしても、三井信託は潰れないだろうから、大いに暴れられんことを。

御自愛を祈ります。

追伸 武井君はお酒も少々いける好いサムライです。北国の秋を適当に楽しませてやって下さい。(註)日ヶ窪の旦那とは藤島敏男さんのこと)

〔昭和三十七年九月十日付葉書〕

御便り有難う。お蔭様で登頂出来ましたが随分長い氷河の旅でした。二度のつとめの左棲、老妓の執念を御笑い下さい。年をとりますと、きびしい氷壁の登攀より、はるかに見たチャントンの山々、ヤルカンド河の流れに後髪をひかれる思いで帰ってきました。ここしばらくはヒマラヤでササクレ立った心を、静かな秋の山でいやそうと考えています。日ヶ窪のダンナは相変らずシブイ山々を荒し廻っているようです。長髪隊の成功

は見事でした。初陣の兎首、長い伝統はこうしたところに花咲くものでせう。今年のヒマラヤで最も高く評価されるべきものです。上京の折にゆつくり話をしたいものです。貴店のBGMの調子は如何ですか、北海道の山々を満喫している様子、うらやましいと思います。

草々

(註)長髪隊云々は北大のチャムラン登頂のこと。BGMはバック・グラウンド・ミュージック)以上二通共私が札幌に在住していたころに貰ったものである。

史占春氏一行が

ルーム訪問

総務委員会

さる七月十九日夜、中国登山協会副主席史占春氏ら四名がルームを訪問、佐々会長以下多数の会員が集まって楽しく交歓しました。

一行は史占春、劉大義、王鳳桐、宇再晴の四名。来年、西チベットにある世界第二の未踏峰ナムナニ峰(別名グル・マングータ七六九四米)の日中合同登山(日本側京都大学、同志社大学)の打合わせに来日したものです。

あいさつのなかで史占春氏は、『日本山岳会の方々の中国における登山を大いに歓迎、期待を寄せています。』と強調していました。(西村政晃)

が『丹沢夜話』を読んでいて久しぶりに相好をくずした。

山に登っていつてなにかを落としたと気付いてもそれを探しに戻ってはいけぬ、と忠告するくだりだった。先へ進め、と筆者は忠告する。「登山路に出れば必ずといってよいほど他の人が落としたものを見つめます。ハンケチをなくしたならば、きれいに包装してあるちり紙を拾うことは確実です」登山入門書の数あるなかで、こんな忠告の書かれたものがあつたろうか。

筆者はドイツ生まれで、すでに半世紀以上も日本で暮らし、神奈川県下の受験校として有名な栄光学園で長らく教師と副校長をつとめ、今は横浜市内のカトリック教会主任。栄光学園が丹沢山塊の内ぶとところにある札掛にヒュッテをもっている関係で筆者は好むと好まざるとにかかわらず丹沢に足しげく通ったにちがいない。しかしそのヒュッテが建てられたのは昭和三十三年のこと。筆者と丹沢との縁はそれよりずっと古く、昭和十年代はじめに結ばれていた。ひとときわ鼻の高いこの外国人が、丹沢山中で、異郷人を見たこともない山人から天狗と思われて手を合

わせられる話など、ほほえましい体験談がつづられる。と同時に、昭和三十年の国体で開発整備された丹沢からは想像もつかない古き良き牧歌的な、しかも丹沢の山を生

業の場とする木こりの生活ぶりにおよぶ人間的な山のことどもが描かれていて、貴重な証言にもなっている。オバケ沢に七年間も住みつづけて死んだ若い狂女の死を土地の古老の言葉そのままに報告してくれていて、なまじな怪談ばなし以上に迫力がある。

山麓の名木、登路に立つ樹木につけられた熊の爪あと等々にそがれる筆者の視線からも教えられるところが多い。なるほど丹沢はひたすら頂上を征服するために血道をあげるような山地ではない。眺めつつ、見回しつつ山路をたどるのに向いている。ここにも山登りの仕方の一つが、かしこまって観念的な哲学というのでなしに、さりげなく説かれていて、しかも説得力がある。けつして過去の記憶にぬくもりをあてえようとするだけの懐旧談に終わっていない。

高校生との登山にふれる個所は、同世代の若きアルピニスト予備軍に読ませてみたい。天狗のあだ名で生徒たちから親しまれたこの老ドイツ神父の丹沢物語を私は楽しく興深く読みおえた。紙質と活字写真の刷りの良さもまた、この愛すべき本の重要な取り柄である。

有隣堂刊、一四〇〇円、B6版二二四ページ (宮下登三)

死の地帯

尾崎 鑑 著
星 崎 監 治 訳

死の地帯とは山にあって標高七千メートル以上の、人間が生存できないとされてきた地帯のことである。しかし題名から受けるような凄惨な様子が書かれているわけではなく、著者は自分の悟りを説明し、自分の登山観をこの本で語るうとしていく。

まず登山中に、死を偶然まねがれた者の体験談を多数列記し、それにレビッチュやブルなどの体験記を引用し、ギド・ランマーの登山観を各所で批判しながら、一九七〇年にナンガ・パルバート、七二年にマナスルから著者が生還したときの経験を加え、こうした経験、理性を越えた別の次元の働きによって生じた感覚現象であるとして把える。そして著者がヒドン・ピークやエベレストの頂上で感じたという一種の精神的オルガスムを、ニルヴァーナ(涅槃)訳書ではニルワナとしているが、サンスクリット語はニルヴァーナ)だとし、京都の竜安寺の石庭で得たような気分だったとする。そしてこういったニルヴァーナに至ることが、これからの登山の課題であるとしている。

このような東洋的な考え方がヨーロッパの登山者から出てきたことは東洋人としては有難いことだが、いくつかに気になった点を上げてみた。

もし筆者のいう「無」が、禅宗などという「無」であるのなら、

交野山荘の
「シユミットボン」

早乙女緩次

私は長谷村浦へ出掛ける機会のあることに交野老をお尋ねし、お宅の炉端に上がりこんでは山談義に花を咲かせている。

今年の二月、海拔一〇〇メートル地点に所在する交野氏の浦部落へお訪ねしたときは、数年振りの寒波襲来とかで、気温はマイナス一五度を優に下っていた。

羊、山羊各二頭、チャボ二羽、犬二匹、猫三匹の飼主との酒盛りでは、山村生活の裏話から、山はもとより、動植物等、諸々の分野のことが酒の肴になった。何といつても昭和十七年十二月八日の上高地・ウェストン師レリーフ撤去作業が、興味をひくエピソードの一つだった。

小さなストーヴの上で、土鍋に煮込んだオデンを味わいながら、『そんなにお前はなぜ嘆く。草の梅に寝転んで、わしが言ふこと、お聞きやれ。人の浮世の見えを棄て、口笛吹いて、気を安く、現の夢を見ていやれ、草臥れ息めに山を見て、腹が減ったらまた歩け。』と最後まで唄い続けた途端、

「シユミットボン作、森林太郎記、岩波文庫『街の子』より」
同時に口をついて出た言葉だっ

た。

「貴方も知っていましたか、ここれらの山の歌集を求めても、この楽しき唄の作者も訳者も、決まって不詳としてある。何ごた、ケシカラン。貴方、いつの日か多くの山人たちのために、この歌詞のことに付いて明らかにしておいてくれませんか」ということになってこの一文を草した次第。

山岳スキー技術講習会

参加記

齊藤 健治

本年は守門大岳を中心にして山岳スキー技術講習会が四月六日から八日まで実施された。

五日午後十時十分上野を發ち、翌六日四時四十五分長岡着。先着後着の仲間が駅の待合室に集合。バスにて午前九時半出發。栃尾着十時三十分。栃尾着十一時三十分。公民館で市長代理として、田辺喜作助役から懇ろなる歓迎のご挨拶と、湯茶の接待に預り、持参の昼食を摂る。そして今夜のためと沢山の地酒の贈与を受ける。

四時間以上歩いてやっと着いた道院荘は、流石に入口は深い雪に埋っていたが、中に入ってびっくりました。木の目も鮮かな大玄関。三十畳はあらうかと思われる畳も新しい大広間。プロパンガスのある近代的設備の調理室。

前夜祭は地元出身でもある桐生

高山へ登らずとも得られるものとする著者が言っているのは分かるが、死の地帯で体験することに力点を置いたり、著者が全ての八千メートル峰をねらっているといった点は、萬人に悟りの機会を示した仏陀の教えにそぐわず、この辺は説明不足といえるだろう。

また本書には「無」という言葉がかなりたくさん出てくるが、二四六ページに「自分の無と真正面に対峙したところのある者」と「無」を相対化したところがある。これは禅定に明け暮れる者には考えられない表現だろうし、生死の境を彷徨しているときの幻想ともとれる現象を、理性を超えた別の次元

指導員の司会で開かれる。開会の辞を地元の佐藤支部理事が述べられ、続いて渡辺兵力技術顧問が謝辞を述べ、酔う前にと明日の計画と注意を、富山から熊々技術指導のため出向された高塚氏が説明された。

翌七日午前六時起床。朝食六時半。出發七時半。白雪を蹴って守門大岳を目指す。万太郎を経て登行約一時間、案内の荒木さんと別れる。それからまた一時間半、保久礼の山小屋に着く。これからが登りだ。保久礼小屋の屋根には二メートルもの雪が饅頭笠のように乗っている。あたりは樺の大木の間。格好な休息所だ。ここで身支度を整える。

の働きによる感覚現象とするところも、禅定に入る者が魔境といって警戒しているものと思う。

その他、細かな点では孔子の言葉。これは孔子ではなく、秦の『呂氏春秋』に載っている「不レ蹶・於山一、而蹶・於垤一。」でも、ぐらゐの山ではなくありづかにつまずくであり、金剛雲を蹴って一千里を翔け上がったのもなお釈尊の手の中にあったという悟空の話の引用の仕方、どこかピンとがはずれている。

メスナーの言う哲学的表現は西洋哲学を識るヨーロッパ人種からは見せかけの哲学といわれたりしているようだが、そのためか彼ら

二時間もかかって登った頂上から、滑降するのに恐らく二十分はかからなかっただろう。それから勢揃いで下山だ。雪の砂漠を思いのままに下り、道院荘に帰着したのは午後三時。

その夜は栃尾の有志の方々が酒持参で登って来る。明日は下山ともなれば、誰もが今日のスキー登山に満足して自由奔放だ。明ければ昨日と打って変った雪。後片付けをして、二晩厄介になった道院荘を後にしたのは八時半。

栃尾の公民館では、上村区長、佐藤、室賀越後支部理事、鈴木越後支部会員等諸氏の出迎えを受け、高塚指導委員長の講評、渡辺

のよく知らないエキゾチックな「無」で彼らに自分の考え方を解らせようとしているらしい。しかし、この試みも合理的な考え方の中で育った著者には無理のよう

われわれになじみの深い宮本武蔵が「無」に徹して把えた劔の奥義は「平和」だそうだが、登山道といった形で山登りをするのであれば、お杉さんのように、念仏を唱える口で人の悪口を言うような求道者(?)にはならないよう期待したい。

一九八三年八月二十日 山と溪谷社刊 二五六ページ 定価一八〇〇円 (岡沢祐吉) 図書紹介

指導顧問の今回の行事の感想と、地元各位に対する謝辞があり、お別れパーティとなった。

雪もやみ、長岡に向う頃には青空さえ見えて来て、二泊三日の楽しい山岳スキー技術講習会も無事故で終了した。

これも準備から指導にと努力された講師各位、サポート隊並びに地元栃尾市長を始めとする関係各位の心からなるご支援、ご協力のおかげ、感謝と敬意を表してこの稿を終る。

参加者 内山修一、小松原一郎、荻原賢司、久保三郎、佐野加代子、内山城、原謙一、齊藤健治、下田玲二、根本三男、小山勉、早川英夫、山崎幸和、佐藤金一、齊藤省

吾、佐藤高志、室賀輝男、藤井信
渡辺兵力、高塚武由、桐生恒治、
●報告●

奥秩父自然観察山行

自然保護委員会

いつになく雪の多い年であったが、目もまばゆい新緑の中で懸案であった奥秩父山行が行われた。心配した天気もからりと晴天、五月二十六日(土)に西武池袋、朝八時半発、ちちぶ五号で出発した。武蔵野の真つただ中を疾走する電車から痛々しく削られた武甲山の岩壁を見つ、一時間半足らずで秩父着、お花畑乗換で三峰口着十時二十五分。そこで民宿甲武信のマイクロスパスを待つ。

十一時に三峰口を出発、栃本に向かう。途中で秩父湖上流滝沢にかかる不動滝を観賞する。燃える緑の中を落下する五十メートルの大滝は大滝村の名の起りと言われるだけあって素晴らしい。所々に立てある樹名の札は植物名を覚えるのに役立つ。百聞は一見にしかずである。入口に戻って段々畑の栃本部落の中の民宿甲武信に着く。庭は一面の春の花の海である。少憩後付近を散策する。大峰山自然歩道があり、栃本峠に至れば向かいの中津峡谷から吹き上げて来る風は涼しかった。峠に快適な休憩所があり、夏の月見をかねて再遊したいと話し合い、秩父の先

丸岡博昭、菅井考作、荒木修平

覚者田部重治氏の詩碑を訪れて宿に帰る。

珍しい山菜の多い夕食をしながら、遠藤委員の紹介により埼玉県山岳連盟副会長の浅見豊氏に奥秩父の今昔についてお話を伺う。ありし日の和名倉山の原生林、削られ行く武甲山の姿、果ては秩父困民党の話など尽きることはない。終戦後の経済困難の折の伐採により、国宝的な奥秩父の原生林のかなりの部分が失われたことは返す返すも残念なことであったが、幽邃素朴な民宿郷として大滝村が伸びることを願う。

翌朝もからりと晴天。川又から滝川谷を上って甲州塩山に抜ける予定の国道百四十号線の現状を見るべく、総勢十名でマイクロスパスで八時半に出発する。川又を過ぎ、工事で痛んだ山肌に比べ、対岸の東大演習林と思われる針葉闊葉樹混交林は原生林の面影を整え、燃えるような新緑の盛りで、これ以上はないと言われる紅葉の秋をしのばせる。道路山側のセメント吹付けの金網が露出し、崩壊が案じられる。豆焼沢ホチ滝付近が現終点であるが、巨費を投じた大アーチの橋に驚かされる。スーパール道・国道といかに名前が違っても、莫大な費用をかけて山河の損壊を繰返す行為はさげたい。行き

中高年者の大雪山スキー縦走

佐々保雄

山スキーは変革のさなかにある。スキーを荷上げの道具と考えるのではなく、それ自身内容の濃いものへと変りつつあるのだと思う。

メンバー七人のうち札幌からの二人を除き、残りは中高年者だったが、中高年者だからこそハイテクニクにハイタッチでやることにして、全員が最新のスキー装備をした。

それらは、プラスチック兼用靴、新型の山スキー、新型の貼り付けシール、全方向レリースの安全機構が付いていて踵が九〇度以上あがるビンネットサニ〇〇〇ビンディングと登高支柱、スキーアイゼン、長さ可変のストックなどである。

メンバーは佐々保雄、松丸秀夫、川合周、高田光政、山本良三、亀井秀子、大淵喜隆(年令順)で年は各々、七七歳、六九、五三、四九、四六、不詳、二五。

一九八四年五月十九日夕に、以前はユコマンベツ、いま旭岳温泉の白雲荘に集合した。前祝いの食膳が驚くほど豊かだった。翌二十日、雲一つない快晴に恵まれ、旭岳(二九〇米)から黒岳(一九八四米)まで、二千米の高地を一〇軒余り縦走して層雲峡に下った。

朝八・〇〇出発、ケーブルで姿見へ。九・〇七雪上車に乗って旭岳の北斜面を廻る。雲は腐って柔らかい。斜面を斜めに上るので時折横になりして肝を冷やす。雪上車は遂に熊ヶ岳との間のコルから一〇〇米程下で進まなくなり、降りる。

早速スキーにビンネットの貼り付けシールをつけて、旭岳に登り始めたのは一〇・〇五。旭岳頂上(一一・〇三三)。よく晴れて北海道の最高点からの

三六〇度の展望はただ素晴らしいといふほかない。山々を指呼していると瞬く間に時がすぎる。

前途が長いので(一一・〇六)下り始める。雪はザラメになる少し前の状態で、その上に新雪の吹きだまりもあり、きわめて不安定で、片脚に荷重するとスキーが突然沈んだりする。このような雪には短い山スキーは駄目であって、正當な長さが必要であった。

熊ヶ岳(二二・一〇米)とのコル(一一・二五)。殆ど無風で暖かい。ここでクモベニヒカゲらしい蝶を見た。美しい。一一・三五、再びシールを貼り、登高支柱を立てて熊ヶ岳の南火口壁をからむ。シールは良く効き、登高支柱の効果は大きくて、らくらく直登。火口壁の南側の痛に着いたのは一一・五〇。昼食とする。皆のルックからいろいろなものが出た。熊ヶ岳の黒い岩壁、その下の火口は浅く、一面雪に埋って陽に輝き、天上のユートピアの感じである。

一二・二〇に立ち上り、火口壁を東に廻って間宮岳(二一・八五米)に出、大噴火口壁を中岳へと迫る。雪はカルデラ側に残っているが、吹きだまりで甚だ柔らかく深く腐っている上に、浅いクレバスがあったり、岩との間が空いていたりする。それが数日前の新雪で隠れていて、時折はまり込む。このような悪いコンディションのときには、安全を守るために全方向にリリースする安全縮具が必須の装備であった。

中岳(二二・一三米)とのコル、裾合平への分岐点に一一・四〇。北鎮岳の肩についたのは一一・二〇だった。そこから一気に雲の平に向って滑り下りる(一一・三五)。ここは雪がザラメ、広い斜面、三軒近い下りを快調にとばす。黒岳小舎は雪に埋れて屋根だけ見えた。

黒岳頂上について一休み、一七・〇〇、一七・四〇。ここは今年の年号の高さ一九八四米である。

早く果ての静かな桃源境としての橋本であって、やたらなぶち抜き道路が出来ては、単なる通過一地点に墮して、ゆっくり泊る魅力が失われることを憂える。

時間の余裕を見て、二瀬ダムより中津川にはいり、神流川出合で昼食をとり、ゆっくり溪谷美を楽しむ、落合で予約した秩父まんじゅうを買って三峰口に戻ったのは二時過ぎであった。

参加者 国見利夫、小倉厚、中保、澤井政信、遠藤光男、麦倉啓、小西奎二、坂井真、関塚貞享、木名瀬亘 (木名瀬亘)

石岡繁雄氏講演会

科学研究委員会

六月一日の第20回講演会に石岡繁雄氏をお招きし、「ザイルとの三十年を振り返る」というお話を聞きました。

氏は、昭和三十年、前穂高岳でのナイロンザイル事件以来、①ザイル強度の基準づくり、②安全な確保システムの作成、という二つの目標に向って精力的に努力をつづけてこられた。鈴鹿高専を停年退官後も石岡登山安全研究所を設立され、研究にますます邁進しておられるという。一〇〇枚近いスライドと九枚の貼りビラを駆使して三十年間の研究成果の一部を報告されたが、説得力あふれる内容で、氏の静かな口調とは対照的に、迫力満点の講演会となった。

氏はまず、前穂東壁での事故、消防出初式(昭五二、東海市)での事故、タンカーの一〇〇ミリザイルの切断事故(昭五七)を事例として詳しく考察しながら、燃りザイルの切断機構として、縦傷切断がとくに重要な意義を持つことを具体的に説明された。氏はつぎに、一ミリ編みザイルの無シヨック切断(昭五五、北岳バットレス、傍点は筆者の表現)を橋渡しし、講演の論点を現在のザイルへと一気に移し、せん断力に弱いのが現在のザイルであり、それを用いる現在の確保システムに致命的欠陥があることを強調された。

氏は、この欠陥を、せん断力に強く、近年注目を浴びているケブラーザイルを用い、トップが自動制動器を持つことで解決するという立場をとる。氏は、ケブラーザイルの特性に関する実験結果を詳細に報告し、現在開発中の自動制動器の現状と課題を詳しく話された。

全体として素晴らしいお話であったが、科学研究委員のひとりとして氏のお話を一点だけ補足させていたたく。それは、燃りザイルの縦傷切断の現代的意義についてである。

大規模な遠征隊では、ダンライロープや漁業用ザイルなど安価なザイルが固定ザイルとして用いられるが、その切断事故が何度か

頂上からの下りは三〇度を越す急傾斜で、凍っていたらこわい。しかし今はこも積雪は腐って柔らかい。間もなくロープウェイ上のスキー場に出ると雪はしまっている。ウェーデルンでとばして、一八・四〇、層雲峡のケーブル上駅に着いた。有難いことに、ケーブルが、予定より遅れた私たちを待っていてくれた。

快晴に恵まれて美しい山行であったが、雪は殆ど最悪の状態であった。それに対処できたのにハitekの産物である新しい装備の寄与は明らかであった。

とはいえ、楽しい山行ができた最大の理由は中高年の長い経験から来た心の余裕によるパートナーシップであったと思う。

(追記) 老害の弁(若い?)人達におだてられて久しぶりのスキー登山であった。楽しかった。

五年前の春、奥穂山独行の下り、ザイテングラートわきを一気にグリセード。快適だったが、停止の折、膝をひねって以来御無沙汰のスキーから

一気に最新型のスキー用具。ただとまどうばかり。立った姿は正に初心者の腰つき。殊に堅い靴が足に、というよりは身体になじまず、足かせをはめたよう。年のせいもある、登りには往生した。時間のかかった所以で、全行程九時間の予定の所、十時間半であった。そのせいで皆に甚だ迷惑をかけたのではなかったか。正に「老害」のスキー行といふべきか。しかし快晴に恵まれ、それだけ山上にゆくりできたのだから許して貰うことにしよう。

昔、スイスイと滑った所も、キックターンで下る始末、しかし下りとなると、そう遅くもなかった。林間で熊の足跡を見つけたのもキックターンのお陰だった。股制動で長い直滑降も楽しんだ。層雲峡のホテル大雪での乾釜が幾度も高く揚げられたのは、このよきスキー行の故であった。通じて、おもしろい方にはなかなかだったろうが、久しぶり、存分に山スキーを堪能した。同行の諸兄に感謝する次第である。

倉見山荘にて開催

七月会員懇談会

集会委員会 総務委員会

七月 倉見山荘にて開催
二、斉藤桂、千葉重美、梅野淑子、松丸秀夫、中川和道、以上二十名 (中川和道)
七月 倉見山荘にて開催
二、斉藤桂、千葉重美、梅野淑子、松丸秀夫、中川和道、以上二十名 (中川和道)

とながら数名の集会委員の方が先行して、食糧の買付けや、山荘を開けて準備をするうち会員も三々五々と集って、夕方から堂々とびかう中に懇親会が開かれました。途中でプロパンガスが切れ、あわててガスボンベを取替えてに走り、発電機の具合が悪くて遂に発電出来ぬままにキャンドルパーティーに切替える等のハプニングはありましたが、結局、美酒とうまい肴があればあとは何の苦情もなく、笑があり、歌が出て夜の更けるのも忘れませんでした。翌朝は朝食準備のために六時頃に起き出すと、外は雨でした。そ

れも相当の吹き降りなので「これは山行は中止だね。」等と話し合って居りましたが、全員が起床して朝食を取る七時頃になると雨も上り、一部青空も顔を出してきました。そこで、所用で一足先に下山する東原氏を除き、全員が三ノ塔まで行くことにして、山荘の片付けを終え、八時半頃小舎を出ました。ヤビツ峠への林道伝いに車で入り、途中、戸川尾根を越える処で車をすてて尾根へ取付き、シモツケ草や、ホタルブクロが可憐に咲く尾根路を登り出しました。

第三十八回ウエストン祭

信濃支部

●徳本峠越え

毎年のことながら、早朝からたくさん峠越えに参加する登山者が島々宿に集合。島々婦人会の皆さんの湯茶のサービスを受け、蒲生新支部長、上條安曇村長さんの挨拶のあと高曇りで峠越えにはあまり暑くなく、爽やかな空気の中を三々五々出発、二俣までは相変わらず、やや退屈な道ながら全員快調な足どり。二俣からは素晴らしい山歩きを楽しむ。都会生活者にとつて心洗われるばかりの新緑の中を、森林浴を楽しむながら進む。岩魚止で山菜をご馳走になり小休止。途中、もしかしたら、猿一頭が雪崩にやられて白骨化しているのを見る。峠の人の話によると、

霧の森林帯の中に急登を続けて、全員が三ノ塔の頂を踏んだのは十四時四十五分でしたが、一面の濃霧が立ち込めて何も見ることが出来ません。それでも一同賑やかに昼食を取り、往路を車の処まで戻り開散しました。

参加者 金沢喜八、東原進、山口 曉、佐藤征郎、高沢英雄、神山良雄、若林幸子、藤田礼子、水越裕哉、石橋正美、板倉健二、関塚貞享、村木富士、神崎忠男、神崎めぐみ、藤井正彦、入沢郁夫 以上十七名 (入沢郁夫)

峠付近と島々谷で十四頭のかもしが犠牲になった由。

心配していた峠から明神側の雪も想像していたより少く、無事全員上高地に到着する。

早朝より峠越えされた佐々会長も早々と山研に到着された。参加者は安曇村で募集した三〇人を含め約五〇〇人。(金子盛二)

●碑前祭

明けて三日、祭典の当日。快晴……とまではいえなくても、この時期、この場所では得難い素晴らしい天気だ。うす紫にかすむ穂高の夏の岩肌の色。正面に望まれる霞沢の三本槍。音をたてて流れる梓の清流。三十八回ウエストン祭と張り出された碑前の横断幕の下に

は、開会の一時間も前から、軟硬様々な仕度の人の群が集いはじめ。正十時、いつもの歌声。立教

ムクチナートの旅

山本朋三郎

チベット型式の建物は屋上は砂を敷いた様式になっている。前夜はカクベニのクリシユナ・ロッズの屋上に幕営。満天の星を満喫。暗く、臭気のない夜はロキシーは最良の睡眠薬。



城塞部落カクベニ／山本朋三郎

黄色のベスト、Tシャツ、パーカーなどカラフルな参加者たちによって埋めつくされた。

「CHO!」と叫ぶが、私の叱声では馬は動こうともしない。ヒンズー教徒は、インドから二ヶ月も歩いて、一生に一度訪れたいのがムクチナートの聖地である。

隊商のラバの首に吊した鈴音が目覚む。『ティ』と、六時にポーターが温かいミルクティーを天幕に持参。程なく、洗面器へお湯が運ばれて来る。雨が降ろうが、雪の上だろうが同じである。日本より持参の、ミソ汁、タクワン、そしてキッチンボーイの作った五目焼めしの朝食。食後のフルーツは現地産の小さなリンゴ一個。朝食を終り、ミルクティーのコップを片手に、屋上から美しく輝やく、ニルギリやチイソ・ヒマールの山山を眺める。

エベレストのとなりにあるCH・O・YU(八・一五三米)は一九五三年、オーストリアのティツヒの三人の小パーティがあつた登頂した。チヨウ・オユウとはチベット語で『トルコ玉の女神』。それが山の名前。コットとは丘の上の宮殿の意味とのこと。昔、

ジャルコットから一時間くらいの距離。ムクチナート・ヒマールの万年雪が伏流水となって地上に現われ、そして、また伏流水になってしまふ地点がムクチナートと通称されている地点である。天然ガス或いは灯油とも言われているが、兎に角、昔から不滅の灯火がとももされているラマ寺院が、尼さんに守られている。長い長い堀のように並んだ、マニ車(ラマ教の聖地に刻んだ回転筒)の列に守られた。ラマ教の聖地に

祭典は、既存の宗教の形式にと
らわれることなく、自由なたち
で若々しい歌声の中を、のびのび
と進められた。

蒲生明登新信濃支部長の挨拶の
あと、地元安曇小学校と全国花い
っぱい連盟の子どもたち三人によ
り、ウェストン師レリーフに色と
りどり乱れ咲く花束が献ぜられ
た。続く献歌は「ウェストンに捧
げる歌」会員故岡村精一氏、辻莊
一氏による作詞作曲で、五十名ほ
どのエーデルワイスの仲間によつ
て献呈された。続いては、物故会
員、物故登山者たちへの黙祷。挨
拶には佐々保雄会長。会の成立の
頃の事情とウェストン師とかか
わりを中心に、会の現況やウェス
トン祭の盛況を讃えた。また、例
年この席に顔を見せていた元副会
長折井健一氏への追悼の言葉を副
え、さらに会員故加藤保男、植村
直己氏の業績にもふれて、その死
を惜しんだ。

来賓祝辞として地元安曇村上条
村長さんは、日本有数の素晴らしい
自然をもつ地元として、これを一
木一草たりとも損ねることなく、
子孫に伝えたいと力強く決意を表
明された。最後に、アルプス少年
少女合唱隊の児童達による「夏の
山」の爽やかなコーラスが、丸山
先生の指揮により周りの山々にこ
だまして会を締めくくった。

つづく第二部記念講演会。山田
二郎副会長は、昭和二十二年、第

一回のウェストン祭に参加したと
きの回想や松方三郎会長との出会
いを語り、ウェストン師の著書の
序文から引用し、登山を現在のよ
うに隆盛にした日本人の能力を称
えた。山に登る者の態度として、
先々に起り得る事態を考慮に入れ
て歩くこと。山に登り、無事に下
山するまでが登山であること、山
を降りることに、もうすこし神
経を使う必要のあることを強調さ
れた。最近、下山の途中で事故を
起こすことについての警鐘であつ
た。

次いで、神崎忠男常務理事は
「登山における探検と冒険」とい
うことで次のように講演した。「ウ
ェストン師の徳性によつて発足し
た日本山岳会が、今やカンチの統
走に成功するまでになり同慶の至
り。ウェストン師が日本アルプス
にはいったころは、登山が探検で
あり冒険でもあったと思うが、今
はこれらが細分化され、また一面
それが統合されてきている。

探検は目的遂行のために回避す
ることのできない危険にたち向う
ことであり、冒険はそれ自体が目
的であることで区別している。地
球の探検で、三極を自らの脚で究
めた人はいないが、それに最も近
いところにいた一人が植村直己氏
だった。

山に登ることの喜びは、登るこ
とのよさのほかに、山をめぐるこ
のひととのふれ合いの中にもある。

は、ダウラギリ、ツクチェ・ピーク、シタ・カン
等のダウラギリ山群の白き神の山々が、幾重にも
重なるヒマラヤの山波の上にぬきん出て輝いて見
える。右方にはムスタンの山々も間近く見える。
何百とある、大小の四角い堆石の群れは、天上の
極楽に埋葬された人の墓である。此地に来て、ぐ
るりとヒマラヤの山々に囲まれた、ムクチナート
の聖地は、神々に守られた別天地。誰しもそう考
えるであろう。

ムクチナート・ヒマールの山々のくびれたところ
が、トロン・パスである。峠を下りると山道は
ムクチナートのもう一つの神、シバの神を祀った
建物に出会う。下界からはるばる信仰登山して来
る信者の宿舎の、立派なダルマサールもある。二
ヶ月も歩いてインドから来た行者が、教文を唱え
ながら百八つの滝に順次うたれ、長い時間をかけ
三回繰返す行をする姿は、長いヒゲに水滴が輝や
き、ガンダーラ出土の断食中の釈迦苦行像の現わ
な肋骨のように、インド行者のヤセた胸が黒光り
し、美しく神々しく見える。

気の合った仲間と登る楽しさを教
えてくれたのは加藤保男氏だつ
た。

十一時すぎ、歌声の流れる中を
また来年の再会を約して散会し
た。そのあと、佐々会長のサイ
ンを求める若人の列が絶えなかつ
た。今年の北アの夏山が開幕とな
った。

(一志幸夫)

熊本支部総会

昭和五十九年度熊本支部総会は
梅雨のさなかの六月二十三日、九
重山西麓にある熊本県阿蘇郡産山

村の民宿「大平」で開催された。
雨中にもかかわらず十六名が出
席し、大木野常任委員の司会によ
り議事がすすめられ、次のとおり
新しい役員が選任された。

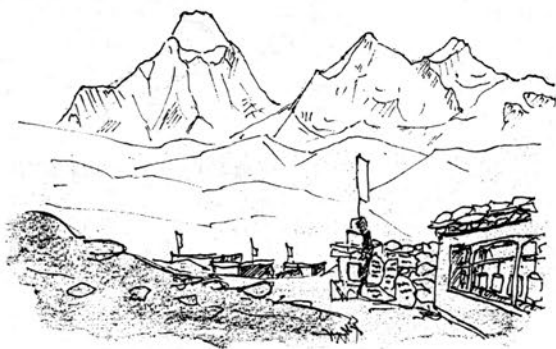
支部長 西沢 健一(留任)
常任委員 本田 誠也(新任)
大木野徳敏(留任)
委員 奥野 正亥(留任)
馬場 猛()
石井 久夫()
工藤 文昭()
和仁古 昇(新任)

会計監事 和仁古 昇(新任)
また五十九年度秋季例会として
は、十月下旬、宮崎県上権葉の扇

山(二六六一米)で実施すること
とし、恒例の新年晩餐会は一月十
二日、熊本市内で行うことをきめ
た。八十周年記念行事のうち、支
部の主体制に委ねられたブロック
別の記念晩餐会については、中心
となる福岡支部をバックアップし
て積極的にすすめることになつ
た。

議事のあとは恒例の懇親会とな
り、民宿自慢の山菜料理に、会員
持参の地酒や焼酎が卓上せましと
林立し談論風発、梅雨雲を吹きと
ばす盛会であつた。

翌朝は一層烈しさを増した雨の



ムクチナートよりのダウラギリとツクチェピーク／山本朋三郎

中、予定していた眞師岳登山を中止して近くの池山水源に遊び、早々にお開きとした。

(本田誠也)

岩手支部総会

過る五月十九日、岩手県下閉伊郡川井村、区界旅館で開催した総会で新役員が左の通り決定しましたので報告致します。

△支部長 佐藤敏彦(三期目)
△委員 総務・高橋俊紀、和田庄司、指導・菅原省司、小野寺正英、自然保護・湯浅俊行、近藤有慶、科学・石村 実、中谷 充
地区・村上 力、小田島政行、鹿野松男(新、関口宏(新))
△監事 田鎖寿(新)、安井 豊
△顧問 笠原潤二、阿部国雄(新)

他はいづれも留任

第十一回かぬか平山行は残雪のなか好天に恵まれ五月十九日、鬼ヶ瀬山七二四米、二十日、桐ノ木沢山二〇九米、二十一日、御大堂山一九六米に登頂した。
参加者 阿部国雄、石村実夫妻、田鎖寿、菊地修身、鹿野松男、高橋俊紀、近藤有慶、小野寺正英夫妻、和田庄司、門田房男、関口宏、須々田秀美、小口洋右、佐藤正、宮伸徳、松田和弘、畠山優、佐藤紀子、佐藤敏彦
△東京地区 望月達夫、川崎精雄、

織田沢美知子 (佐藤敏彦)

北海道支部総会

北海道支部総会は、六月十八日札幌駅前雪印パーラーで開かれ、昭和五十八年度収支決算、事業報告、昭和五十九年度収支予算、事業計画案が承認され、支部役員を左記の通り選任した。続いて寸暇を縫って出席された佐々会長より創立八十周年事業について会員の協力を要請された。北海道支部は総力を挙げて取り組むことを約した。そのあと、伊藤紀克評議員の音頭で乾盃、続いて新任の橋本支部長、芳賀副支部長、野田、水科支部委員が各々挨拶。続いて訪欧の旅より帰朝されたばかりの井手先生の土産話に雰囲気盛り上がり、例によって『滝』『鶴』『ちん』で二、三、四次会と続いたのはいうまでもない。

支部長 橋本誠二
副支部長 芳賀孝郎、兼平治水
支部委員 小林 年、辻井達一、自然保護 浅利欣吉、八十周年 平野 明、同事務局 高沢光雄、石井忠雅、記録会報 久保田優一、集企画 野田四郎、集 会 柳田凉子、川越昭夫、事務局 亀井秀子、三浦勝幸、監 事 横江一郎、金井五郎

お知らせ

例会講演会

日時 九月二十七日(木)七時より
場所 ルーム集会室
演題 ペルー、「コルディエラ・ブランカ」の東
講師 児玉 茂委員 海外委員会

フリークライミング

技術講習会

ヘッドフリークライミングの最新技術の指導講習会を、好評につき本年度も開催します。

山川 力

五十九年度事業計画

七月十四、十五日大雪黒岳登山
八月十一、十二日 日高神威岳
九月八日 観月会 真狩
十二月八日 忘年会
三月十日 ニセコスキー
出席者 朝比奈英三、加藤正己、石崎貞子、小林年、佐々木喜一、山川力、伊藤紀克、橋本誠二、柳田凉子、野田四郎、芳賀孝郎、金井五郎、赤石喜恵子、野口礼子、杉野目浩、及川敬一、横田春雄、石井忠雅、水科行雄、井手貴夫、沢田長子、三浦勝幸、亀井秀子、兼平治水、高松秀彦、佐々保雄、佐々木孝雄、浅利欣吉、川越昭夫、有馬純、平野明、本多矩、新妻徹

(平野明)

期日 十月二十・二十一日(泊)

場所 奥秩父小川山周辺

(金峰山荘別館宿泊)

参加費 六千円(含、宿泊費、食費、保険料、雑費)

主任講師 池田 功氏

申込締切 九月三十日

募集人員 三十名程度

申込先 山岳会事務局

指導委員会 青年懇談会

図書交換会のお知らせ

図書委員会主催の第十七回は十月二十七日(土)午後二時から本

会ルームで行われます。御不要の山岳図書を持ち寄り、お互い交換するのがその目的です。山岳図書に関心のある新入会員各位の御来場をお待ちします。詳しくは七月号「山」を参照。 図書委員会

映画会のお知らせ

日時 九月二十日(木)
午後六時三十分より
場所 ルーム・集会室
画題 『ドキュメンタリー エベレスト』
(一九七〇年)
フィルム委員会

八十周年記念事業募金応募者ご芳名(昭和五十九年七月十七日まで、敬称略、順不同)

(三〇〇) 佐々保雄、(二八〇) 田口二郎(追加八〇)、(二〇〇) 片山英一、(一〇〇) 橋本龍太郎(追加一〇〇)、(一〇〇) 中島信一、山野井武夫(追加一〇〇)、(一〇〇) 今井友之助、高山忠四朗、岸田権二、小林政志、小原俊、梶正彦、松沢哲郎、長谷川良典、三辺夏雄、和田城志、佐々木慶正、岩下莞爾、中村進、吉田宏、山本宗彦、北村貢、鹿野勝彦、平野隆司、只野直孝、寺本正史、東英樹、磯野剛太、片岡泰彦、三谷統一、神崎忠男、増山茂、賀集信、岡村武、宮下秀樹、伊丹紹泰、重恒恒夫、丸尾裕治、飯田肇、林田康明、小林春好、大谷亮、大谷直弘、広川健太郎、尾崎隆、藤原一孝、中屋健一、村山雅美(追加八〇)、(六〇) 小原勝郎、島田興、遠藤光男、梅野淑子、望月達夫、平田真士、田村俊介、野口末延、鳥居鉄也、西沢健一、片桐盛之助、末松大助、交野武一、金尾実(追加四〇)、(五〇) 松村潤、重村清、穴田雪江、広江研、(四〇) 菅野弘章、河野之保、高橋早苗、松本熊次郎、朝比奈英三、筒井稔、麻生武治、川森左智子、斎藤敏男、山田二郎(京都)、(追加二〇)、(二〇) 嶋崎兵市、松沢潤吉、笠原藤七、(二〇) 大竹義信、北島正八、広瀬深、黒沢通子、山本元、岩堀瑞子、高尾徳繁、鈴木松三、小原晴子、早川義郎、遠藤昭治、新妻徹、本田誠也、小田哲夫、丸茂キクエ、河村栄二、鈴木昭、和田力造、林稔、北島光子、山崎幸和、南雲克良、三栖寿生、青木

正樹、石上隆章、岡田市三郎、小川九三雄、大森弘一郎、小林基子、堂本曉子、中島道郎、中山昇二、宮崎豊喜、横有恒、庄司駒男、中山啓司、大森常三郎、平井吉夫、瀧山義、丹部節雄、宮城恭一、近藤恒雄、石田国夫、鳥居亮、近藤裕、高沢英雄、菊地俊彦、今井洋地、田高卓士、水野公男、白川勇、宮島太郎、渡辺照人、松屋信之、中井巖、資延憲英、渡辺正臣、下崎広、横田明男、岡部正敏、鷲尾彦七郎、(一〇) 蓮田清、鈴木千定、佐藤静夫、平松勝司、加藤利徳、小椋凱夫、仲徳二、近藤有慶、浜田宏、甲能豊三郎、長清真砂子、大塩條児、大島輝夫、手塚宗求、三上正治、松本慎太郎、矢尾板二郎、遠藤明男、湯村光典、湯村まさみ伊藤博夫、桂重英、中村小一郎、千田早苗、高橋達雄、橋本源之丞、成田幸雄、金森繁三郎、稲垣一郎、田村聰明掛川統之、森谷虎彦、吉野慎造、佐藤務、楠トシ子、堀井昌子、長坂博、小倉由美子、塩入章夫、佐藤一夫、笹川慶子、小林直人、鳥居寿興、倉島正吉、宮本貞雄、田鎖寿、石坂良一、橋本正己、川端信治、中楚愛三、原始、田中純夫、古田初太郎、大串信治、小山睦子、齊藤喜一、田中久光、松村周典、三品武彦、本田政一、川崎精雄、小田正男、林桂子、高橋久広、小村守志、佐竹春江、三浦繁司、南川金一、石原国利、本田卯太郎、岩田三郎、鈴木勝男、大久保孟、近藤保人、種村重明、小塩丘平、川見博美、鈴木鎮夫、牧潤一、石橋保、東芝山岳会、長島隆会田茂雄、荒木正弘、太田寛治、荻野昌宏、大島秀夫、小野晃、柏秀樹、加藤義明、小島豊、嶋原洋子、菅原修三、中田豊作、原康夫、林幹夫、平山善吉

会務報告

六月理事会

6月11日 午後6時30分

場所 本会ルーム

出席者 佐々会長、田口、山田副会長、田村、西村、神崎、鈴木、河村、村木、松家、梅野、高遠各理事、岡沢理事代行、松田、竹田各監事、嶋原、宮下各評議員
委任 平井、水野、大倉、赤松各理事、飯野評議員
議事内容

◎委員会活動について討議

最近、委員会の行事、会合が多く、内容がダブっているものもある。もう少し簡素化、合理化が必要ではないか。ということから、各委員会の活動、理事の役割などについて討議された。各委員の新陳代謝をはかる必要がある。

◎八十周年記念事業について
募金委員会より 6月9日現在
会員よりの応募状況報告、応募者名は会報に掲載する。

◎記念行事分科会より

各ブロックでの記念行事予定
59年9月上旬……名古屋
59年10月下旬……大阪

60年2月……福岡

60年4月……仙台

60年6月……新潟

60年7月……富山

60年8月……札幌

60年10月中旬……東京

6月16日・17日の支部懇談会で
各支部の意向を再度調査。

◎展覧会関係 具体的プラン検討中

④カンチエンジンガ写真展 場所等について検討中

⑤海外登山分科会 ガウリシヤン

カル計画進行中、学生部ボゴ

ダ計画は東海地区学生中心に計

画進行、来年度については予定

が決まり次第会報に発表

◎カンチエンジンガ登山隊経過

報告

13日星に鹿野隊長以下6名成田

に到着予定、報告会は後日開催予

定

◎会務報告

会報担当理事が多忙のため、岡

沢祐吉氏を代行とし委嘱。

植村直己君に別れを告げる会が

6月16日午後2時より青山葬儀場

で行われるので、日本山岳会会員

各位も友人として参加されたい。
山研利用状況報告。 以上

ルーム誌

六月

二日(金) 第22回科学委講演会

8日(金) 常務理事会

11日(月) 理事会

13日(水) 若葉会山行写真交換

会、カンチ登山隊帰

国歓迎会

14日(木) 海外委講演会

15日(金) 会員懇談会

18日(月) 図書委員会

20日(水) 三水会、山研委員会

26日(火) フィールド委員会

28日(木) 会報編集委

今月の来室者344名

会員移動

支部変更

3007 川森左智子(静岡へ)

9149 山内 眞行(静岡へ)

8687 柳沢 昭夫(東海へ)

北海道支部長

2018 橋本 誠二

退会

6370 渡辺 節子

5498 田辺 幸雄

物故

1853 網蔵 志朗(6・17)

1630 佐藤久一朗(6・21)

夫婦会員

9525 近藤 久子

図書受入報告

図書委員会

昭和 59 年 3 月分受入図書 (つづき)

- 23 信濃博物学会編「信濃博物学会雑誌」光風館書店 明 14 (購入)
- 24 今西錦司編「大興安嶺探検」毎日新聞社 昭 27 (購入)
- 25 パウル・パウアー著 伊藤憲訳「ヒマラヤに挑戦して」黒百合社 昭 6 (購入)
- 26 ハインリヒ・ハーラー著 福田宏年訳「チベットの七年」白水社 1981 (購入)
- 27 René Ferlet and Guy Poulet "Aconcagua : South face" Constble 1956 (購入)
- 28 J.S. ケナード著「霊山に攀る」教文館発行 昭 9 (山崎安治氏寄贈)

お知らせ~~~~~ 集委員会

●スケッチ山行

日時 九月十四日(金)~十六日(日)

場所 焼岳小屋

講師 清野先生

集合 十四日午後十時、新宿センタールビル前

会費 会員二万七千円 非会員二万九千円(往復バス代、一泊三食、飲み物付)

●なお、申込者は必ず五千円を左記口座に振込むこと(太陽神戸銀行新橋支店普通 106-3141629 藤田礼子)

△スケッチ山行批評会

日時 九月二十六日(水) 午後七時

場所 山岳会ルーム

会費 五百円

●秋山山行——共催山形支部

日時 十月五日(金)~七日(日)

場所 山形県摩耶山

集合 五日午後八時半、新宿スバルビル前

会費 会員二万七千円 非会員二万九千円(往復バス代、一泊三食、飲み物付)

持ち物 シュラフ持参

宿泊場所 関川 金沢小屋

△秋山山行写真交換会

日時 十月十七日(水)

場所 山岳会ルーム 七時より

会費 五百円

●きのこ狩り山行

日時 十月十九日(金)~二十一日(日)

場所 志津倉山

集合 十九日(金) 午後十時半、新宿スバルビル前

会費 会員二万六千円 非会員二万七千円(往復バス代、一泊三食、飲み物付)

●今回は喜多方市在住の矢田自昇氏の全面協力で行います。

以上三件の申込・問合せ先

事務局・集委員会

昭和五十九年八月二十日発行

102 東京都千代田区四番町五一四

サンビュウハイム四番町

発行所 法人 日本山岳会

発行者 佐々保雄

編集代表 岡沢祐吉

電話東京(03) 四四三三

振替口座東京三十四八二九番

東京都港区赤坂一丁目三番六号

印刷所 株式会社 技報堂